
モンスターハンター馬鹿が行く異世界はモンスターハンターに似た世界でなければならない

トリィケンスケ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モンスターハンター馬鹿が行く異世界はモンスターハンターに似た世界でなければならぬ

【Nコード】

N0374V

【作者名】

トリイケンスケ

【あらすじ】

モンハン大好きな主人公！！

タイトル通りモンハンの世界に。

邪心はないけど、天生の誑しでハーレムを築く???

さあがんばるぜ！！

注：ハーレム・チート・主人公最高・作者の妄想・等々、が含まれます。

女神様と遭遇（前書き）

ども、トリイです。

異世界へと同時進行でやります。

どうぞよろしくお願いします。

嘘じゃないです!!真剣です!!!
よし、話をしようじゃないですか、会話を!
それは少し前のことだった……

8分前

「おはよ〜起きた〜」
何なんだこのフレンドリーなお姉さんは。

「えっ、ああ、まあ、はい」

これは・・・動揺したんだ、動揺したんだよ!!うん!!「汗」

決ツツして相手が綺麗とかそ、そんな訳じゃない!!「目を逸らす」

「まっ、聞いてね、説明するからね!「ウインク」」

グバゴガア、ブシユウ「心の鼻血ブシヤ」

は、は、反則だぞお、そんなの。ランポス狩りに超電磁砲レールガン使つのと

同じだぞ!!!

「で、なんですか?」

さすが俺!表情に出さないと!!

「モンハンに似た世界に行ってもらおうかと思って!!」「キラキラキラ」

え~~~~~凄いな~~~~~。

「そうですか」「目を逸らす」

どっ、どっ、どっ、動揺してない!!

「そんなわけで7つの特典を、あげるよ。

1つ目に、身体能力。

2つ目に、運。

どくなることやら。

次回、乞うご期待。

女神様と遭遇（後書き）

感想待ってます!!!!!!

異世界の家に現る人影は？……………(前書き)

どーも

ご無沙汰です。

異世界の家に現る人影は？……………

銀亜目録

みんなー、俺だよ銀亜だよ。
密林にある異世界の家にいます。

うん、今すごいことになってんだよね。
え？早く言え？は、はい。
驚かないでね。

……………

美少女2人がリビングに倒れてます！「ドーン」
ふははははは……………知りません。

知らない子です、ナンパもしてない、したことない。
しかも、この子達は、ハンターだ！
防具着てるし、太刀とボウガンもつとる¥(^^^)/

うん、おふざけタイム中止。

これは戦闘後だな。

防具は引っかき傷だらけ、軽く焦げてる。
そして防具は、剣士のほうがボロスシリーズ、ガンナーはウルクシリーズ。

とどめに少し呼吸が荒いな、毒受けてんじゃねえか？

これは解毒薬じゃなくて、げどく草使つて毒抜けなかったか。
つーことは、解毒薬を使い切ったか、持ってないか。
持ってないのは、狩に行くには不用意だな、
つまりは、使い切った上に食らったか。

つまりだ。

密林に居て、この防具を持つレベルの人をボロボロにできて、しかも毒を持っている。

.....

リオレイアかなー。

そうだよね、たぶん。

え？なんでいきなりそんな博識になってるかって？
それは、この家にあつた本を読んだ。

まあ、いいや。

とりあえず、毒を消すか。

えっと、こうして、ここをこうして、ここからここまでをこうして、完了！

次は防具を脱がそう。

え？違う違う、傷の手当てだよ！邪心はない！！
えっと消毒して、薬を塗って、包帯を巻く、完了！

あゝとゝはゝ、ベットに運ぶと。

だゝかゝら！！邪心はない！！！！

さて、目が覚めるまで待つか。

一時間後

「ん」

おお、目が覚めたぞ。

「お目覚めかい？お嬢さん」

声を掛けるぜ！

「だっ誰！！」

Oh、敵意バリバリ。

「ん、この家の主かな」

嘘じゃねーし。

「そ、そうなのですか」

うんうん、そのとおり。

「で、お嬢さんはなんて名前なの？」

聞くべきだろ！ここは！！

「は、はい。私は、シリナ・レンナートで。

こっちの子は、幼馴染で、一緒に住んでて、パーティーを組んでる、ラミル・シンラートです」

ふむふむ。ガンナーのシリナに剣士のラミルね、うんうん覚えた。じゃ、次は。

「何で俺の家に居るの？」

やっぱ聞くべきだよね！

「えっと・・・それは・・・」

言にくいよね、うん。

「リオレイアに、やられたのかい？」

ふっふっふっ、驚いてるぜ。

「なっ、何でそのことを・・・」

「君らの状況を見て、普通に推測したんだ」

僕もできるとは思わなかった。

「その通りです」

やっぱりー。

1時間と少し前・シリナ視点

「やられた……」

リオレイアと戦ったけど負けました。
圧倒的だった、突進やブレス、サマーソルトなど、
どれをとっても強かった。

「大丈夫か？」

ラミルちゃんも心配してくれているが、
結構な傷がある。

毒も解毒したかと思っただけど、無理だった。
おかげでくらくらするし、熱もあるみたい。

「あつ、あそこに家がある！」

家を見つけました、休ませてもらおう！

「すいませーん」

誰か居るだ……ろ……う……か。

「ドサ」

目……かすんで……意識が……

「おいおい誰だ？」

1時間後

「うううん」

「ここは？ベット？」

「お目覚めかい？お嬢さん」

だれかいます！

「だっ誰！！」

男の人は誰でしょう。

「ん〜、この家の主かな」

え！そうなのですか？驚きました！

「なるほど、なるほど」

うん、説明を要約すつと。

- 1つ、この子らは近くのレージ村から来た。
- 2つ、リオレイアだけでなくリオウスも居る。
- 3つ、このままじゃ商団は来ないから飢え死に、村も危ない。
- 4つ、でも、倒せるハンター来ない。
- 5つ、片方ずつ狩ろうと思った。
- 6つ、だけど振り返り討ち。
- 7つ、どうしよう。

「どうでしょう……」

めっさ落ちコンドル。

ダジャレ言つとる場合じゃないな。

「俺がやるうか？」

実は俺、この世界のハンターカード持つてる。

判断基準違っけど。

ゲームだとハンターランクは数字だったけど、こっちではアルファベットだ。

G < F < E < D < C < B < A < A A < S < S S < E A < E S < E X

だから、スゴイという意味のG級はなく、

SSまでは、その階級のアルファベットと同じ段数の依頼階級がある。

俺は、SSだな

「えっと、失礼ですが、ハンターランクは？」

うん、言うだろうと思った。

「あゝハイ」「ポイツ」

確認しろ、と言わんばかりに投げ渡す。

「じゃあ、拝見します」「ピラ」

ふっふっふ、驚くぞ

「え〜と、て！SSじゃないですか！！！！」

う、ウルサイ。ラミルちゃんが起きるだろ！

「なんじゃ？SS？」

お、お、起きた〜！

「やあ、おはよう」

挨拶は大事だ！うん！

「あ、おはようございまする」

うん、そう、しゃべり方変だな。

「あつ、ラミルちゃん！この人は、この家の持ち主で、私たちが助けてくれた、えっと……」

おっと、名前言ってないや。

「銀亜 翔だ。」

「銀亜さんです！」

力説してるよ。

「そうでござったか、それはかたじけのついでいます」

うん、二人とも可愛いな

「で、SSとは何がじゃ？シリナ？」

忘れてたな。

「そうだった！驚かないでねラミルちゃん。

この銀亜さんは、SSランクハンターなんだよ！」

胸はるところじゃねえだろ！そこ！

「な、なんと！」

そうそう、SSってたぶん正しい実力じゃあないな。だって、あの装備だからな、もっと強い。

「しっ、しかしだシリナ。どうやって報酬を払うのじゃ。無報酬はいかんど、ハンターとしてな」

へっプライド高いなっハンター。

「どうしよう、ラミルちゃん!」「チラ」

「うむどうするかの」「チラ」

「うん」「チラ」

「うむ」「チラ」

何でこっち見てんだ?
決めるって事か?

「どっしよっ」「チラ」

「どっするかっ」「チラ」

決めりゃいいのか!?
決めりゃいいんだろ!!

「私たちにできることなら何でもするんだけど」「チラ」

「そっじゃのう」「チラ」

あゝ!!--じゃあやっつて貰おうじゃねえか!!--!

「じゃあ報酬だけど」「キリ！」

「はい」

嬉しそうだな

「金は要らん。お前らの家に住ませてくれ」「ドーン……！」

驚いてる、驚いてる。

いや、ココ退屈なんだよ。

「えっ、そんなことで良いんですか？」

やっぱりね、男と一つ屋根の下ってのは……いいのよ……！

「いいんだ……」

「ハイ！」「笑顔」

いやー可愛いね。

「じゃ、さくつと狩るか」

えっなに？何で固まってるの？

「えっと、そんな、ふらつと行くんですか？」

え？

「何かおかしいかい？」

なんだ？なんだ？

「そんなに簡単に倒せるのかの？」

何だそんなことか？

「え？雑魚だろ？普通のリオ夫妻なんて」

ええ〜って顔してんな。

「そ、それなら、狩りを見せてください！」

「いいよ」

よし、行くか。

え〜と、神様に貰った防具に〜天上天下天地無双刀で行くか。

「すみませぬが、その剣、天上天下天地無双刀ではございませぬか？」

あ〜そついや幻の剣だったっけ。

「そつだよ」

なんか行きたそつだな〜

「一緒に行くかい？」「笑顔」

「ッ／＼／いいのか？」

顔、赤いな

「いいよ、いいよ」

よし行くか。

「じゃ、行くぞ。怪我するなよ、俺が困る」 「微笑み」

「ハイ／＼／／」 「笑顔」

次回

このクソ誑しの狩りはどうなる？
乞うご期待。

異世界の家に現る人影は？・・・・・・・・（後書き）

感想待ってます。

リオレイアアアアア！！シネエエエエエエ！！（前書き）

僕もう一つ小説かいてます。

リオレイアアアアア！！シネエエエエエ！！

銀亜視点

「よし！リオレイアから行くか！」

何でかっと言うとだな、
なんとなくだ！

「えっ？道具なしですか？」

シリナが驚いてるけど、なんかおかしいか？
そもそも攻撃なんて、食らわなきゃ良いんだ。

「おかしくねえだろ？」

おっと、お前は、がけの上で見てるよ

怪我されたら、たまらないからな。

「う、うむ」

よし行くか。

この防具のスキル、自動マーキング。

そうそう、このフィールドって、2Gなんだよね。
で、森丘のエリア5にリオレウス、9にリオレイア。

「んじあ、エリア9だ。」

「はい」

ラミル視点

「はい」

目の前に居る銀亜殿は、
あの天上天下天地無双刀を持ち、
リオレイアとリオレウスを雑魚と言いつつ切った。

そして・・・そのお・・・か、か、かつこいいのだ／＼／＼／
あの銀色の髪、銀色の目、透き通る声、
す、す、す、好きになったのじゃ／＼／＼／

「おい！ラミル！大丈夫か？」

ああ、その声が愛おしい、
なんだか落ち着くのだ。

「あ、ああ、大丈夫だ」

ああ、もう少しであの方の狩が見れる。

「よし、じゃあがけの上に居てな」

「はい、じゃあ後で」

「ああ」

さあ狩りの始まりだ。

シリナ視点

さあ狩が見れます、
どんなものでしょう。

「よっこいしょ」

がけの上にきました、
さあ狩りを見せて下さい！

あ！銀亜さんが走りだしました。

銀亜視点

「はっ」

走り出す俺。

まずは、飛ばさないように、

皮膜を切る。

「おおお!!!」

上段から一撃、

切り上げ、

持ち直してからの上段切り。

よし、ズタズタになったな。

ん？恐怖はないのか？

そんなモン感じる暇ねえよ。

「ふっ！」

咆哮している隙に、

全身に気合を入れ、

翼を折る！

「鬼刃切り!!!」

『鬼刃切り』これは俺が考えた切り方。

理性のリミッターをギリギリまで外し、

気合を剣先まで入れ、

切る切る切る!!!

「バキイイイイン」

よし折れた、

それを確認すると同時に、気合を抜く。

「すごいです!」

うん、シリナちゃん、
胸が当たってる。

これ限りなく服に近いから、
感触が直に来る。

「さすがでござる」

うん、貴方もだラミル、
胸当たってる。

「よし次だ、次」

20分後

「ラアアアアア」

グオオオオオツオ・オ・オ・オ・オ・オ・オ・オ

「ズシイイイイイイイン」

作者：普通に書いても圧倒していて、
つまらないので、
飛ばしました。

「よし終わり」

「銀亜さ〜ん」

「終わったぞ」

「ありがとうございます」

二人とも、胸当たってる！

「よし家に帰ろう」

「はい」

次回

村に行くことになった銀亜の運命は？
乞うご期待。

リオレイアアアア！！シネエエエエエ！！（後書き）

感想待ってます。

あゝもう一人いるんだ。ふうん、帰ってきてないんだ。……エエエ

もう一つ書こうかな。

あゝもう一人いるんだ。ふうん、帰ってきてないんだ。……………エエエエ

—————銀亜視点—————

ハハッハッハッハ。

チートよろしくの力で（実際チートです）
リオ夫妻をぶち殺した、
人の形をしたモンスター事、
銀亜 翔だよ。

いやー 弱 かつ た Z E 。

今、家に帰って詳しく
シリナちゃんとラミルちゃんのことを、
話してもらってる。

「へーラミルちゃんとシリナちゃんは、
同じ家に住んでて、
同じパーティーなのだけではなく、
両親がパーティー組んでたんだ」

そりゃ仲が良さそうな訳だ。

「はい もう一人居ますけど」「ギョッ」

へへもう一人居んのか。

そして腕に胸当てんの止める、
俺の理性がオーバーヒートだ。

「名前なんていうの？」

ヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイ、
俺の脳！腕の感覚を遮断しろおおおおお！！！！

「テイノル・ペイニードでござるよ 翔殿」「ギョッ」

テイノル・ペイニード、テイノル・ペイニード……。
(その後テイノル・ペイニードを唱えに唱える)

いかん無心になるために唱えてたら、
ゲシユタルト崩壊してきた。

グウウウウ！！オれノリセイガアアアアアア！！！！！！

「へ、へへへへ」「ガクガクガク」

俺の中の獣！！抑えろ！！！！

く、くそ！！持ちこたえられないだとおおお！！！！
く、第一種戦闘配備！！！！

敵は核弾頭により、理性の牢獄を攻撃中！！！！！！
現状からの回避をされたし！！！！！！

「あ、あのさ」「グググググ」

もう少し持ちこたえてくれ!!!

「ハイ?」「ギョツ」

本能の獣【ガアアアアアアアアアア】

理性部隊隊長【ちiiiiiiiiiiiiii】

本能の獣【グガアアアアアアアアア】

理性部隊隊員4【た、隊長!!!も、もう・・・ぐわあああああ】

本能の獣【グギギギギギ】

理性部隊隊長&1〜3、5〜7【ウルズ4!!!】

本能の獣【オオオオオオオオオオオ】

理性部隊5〜7【うわわあああああ】

理性部隊隊長【ウルズ5!!!ウルズ6!!!ウルズ7!!!くそお!!!
!俺に力が無いから!!!】

本能の獣【オガアアアアアアア】

理性部隊1〜3【隊長!!!に・・・げ・・・て・・・】

本能の獣【アアアアアアアアアアアアアアア】

理性部隊隊長【皆アアアアアアアアアア!!!】

俺：くそおおおおおもつムリイイイイイ。

「どうしたんですか！？銀亜さん！」「ギョッ」

この場から離れなければ！！！！！！

「あのさ、おなか空いてない？」「がくがくがくがく」

「うゝむ、空いております」「ギョッ」

よ、よし！そうかそうか。

なら食おう、すぐ食おう！！

「よし！じゃあつくりますか！」「

よし離れた！！

「「あ、私も」「

NOー！！！！！！

それは繰り返しにスギナイZE。

「いいや！！俺が作るよ！！！！」

これ絶対！！決定！！！！それがいい！！！！！！

「「じ、じゃあ」「

よっしやああああああああ！！！！！！！！！！

「じゃ、テーブルに座ってて」

そして台所に歩いていく。

次回

村に行くことになる、銀亜の運命は？
乞うご期待！！

あ、もう一人いるんだ。ふうん、帰ってきてないんだ。……エエエ

はい、直しました。

感想くれるとうれしいです。

あゝもう一人いるんだ。ふうん、帰ってきてないんだ。……………エエエエ

さあ!!

前はタイトルとお話がぜんぜん噛み合わないお話でしたが、今回は大丈夫だと思いたい!!!!!!

今回は村に行くお話と、主人公がドンだけチートなのか、と言うお話の準備段階のお話です。

この前釣ったサシミウオとハリマグロの刺身。(醤油は作った)
はじけいわしのから揚げ。

作者【あ〜〜美味そう】

とりあえずは二人を呼んで、食卓へ行くか。

「おい、できたぞー」

二人に聞こえるように叫ぶ。

「ハイ」

二人の声が聞こえたので、食卓に食べ物をならべる。

「この世界の常識について聞いておくか」
実は、詳しくは知らないんだよな〜。

「よし、席に着いたな？」

いただきます！！」

「いただきます！！！」

あゝもう一人いるんだ。ふうん、帰ってきてないんだ。……………エエエエ

今回も準備段階ルルルル。

あゝもう一人いるんだ。ふうん、帰ってきてないんだ。……エエエ

—————銀亜目線—————

どうも皆さん、銀亜翔です。

最近気が付いたんですけど、俺って何に向かって喋っているんでしょうね。

まあ、いいです。

今、シリナちゃんとラミルちゃんにこの世界の常識について聞いていた。

しかし途中からおかしな方向に流れていった。

「ですから！こうなっているのにこうなので！銀亜さんは異常なんです！」

へ〜そうなんだ〜、道理であんなに驚いてた訳だ〜。「棒読み」

「分かっておられるのですか！？貴方は一般人はもちろん、ハンタ

「でも逸脱した力を持っているのですよ！聞いてるんですか！！」
あゝあゝ、聞いている聞いている、聞いているよ〜」心の中なのに、棒読み」

「銀亜さん！！」

如何してこうなったのかな！。

常識は、男女混浴が近親者では、ある程度当たり前で、ハンターの依頼受注制度に少し変更がある程度だったんだが………。

「「わかってるんですか！！？」」

二人が言うにはモンスターはもつと時間を掛けて、それこそ数日掛けて狩るものだったらしい。
今まで、少し色んなことが起こり気に入らなかったが、常識について話すうちに気が付いてきたらしい。

まあ、俺の身体能力やら動体視力やら色んなものが気持ち悪いくらいになっている。

リオレイアの筋肉の動きを鱗の上から見て次にどう動けるか分かるとか、リオレウスの翼の周りにある風の動きを10メートル以上離れた所から見て次に何処からどう動くか分かるとか、鱗の何処がどう脆く斬れ易いか分かるとか、筋肉や骨格から何処に心臓や臓器があるか分かるとか。

ね、気持ち悪いだろ。

で！今居るのは竜車の上だ。

一応クエストの受注は伝書鳩で街に受注したらしいので、レージ村ではなくこちらでは一番でかい“シクスロード”に行くらしい。

そうそう、此処では引継ぎクエストがあるらしい。

これはクエストに失敗した時に他のハンターに頼み、報酬を上乗せして依頼を引き継ぐものだ。

両者の合意の上であれば、ギルドを通さなくていいらしい。

じゃあ、行くつか。

次回

乞つご期待。

あゝもう一人いるんだ。ふうん、帰ってきてないんだ。……………エエエ

今回は予告なしです。

あゝもう一人いるんだ。ふうん、帰ってきてないんだ。……………エエエ

今日はようちやく町です。

あゝもう一人いるんだ。ふうん、帰ってきてないんだ。……エエエ

―――銀亜目線―――

「へ、意外とでかいんだな」

そう思ったよホントに。

もっと小さいと思ってたんだけどね。

「そうですよね」

「ホントにのう」

シクスロードってスゴイでかいんだな。

やっぱり、石の床だけだね。

家は石を切りだして、積み上げてる感じですね。

家の大きさは、現代と同じぐらいだね、2階建てだけだね。

「こっちです銀亜さん」

「こつちですよ」

もっと奥の方に、ギルドがあるようだ。

っていうか、上り坂になってんな、メンドクサイな。

「で、もう少し?」

ちなみに俺は今、神に貰った防具に、ブリュンヒルデ・番傘【斬雨】
・天上天下天地無双刀・阿武祖龍弩を持っている。

そういえば、神に貰った防具って言い方めんどくさいんで正式に名前付けよう。

うゝゝゝん、そゝだゝなゝゝ。

銀龍烈将【神死】でいいか。

「いいえ、まだまだですよ」

「この道を真っ直ぐですけどね」

えゝゝゝゝゝメンドクせえ。

一気にいくか。

「えっ!?! 銀亜さん!?!」

「ちよっ!」

「ちょっとだまって」

何時になるか分からないから早く行くために、二人を抱える。

「よーい、ドーン」

ダン！！

「「キヤアアアアアアアアアア……」

「「

ダッダッダッダッダッダッダッダッダッダッダッダッ

「早い！早いですー！」

「もう少し！遅くー！っ！」

「喋るな！舌噛むぞー！」

ダッダッダッダッダッダッダッダッダッダッダッダッ

自動車並みの速さで走る。

「銀亜さんがたくさんいます！止まって！！」

「そうですねー！！」

ふっ、そんなこと、このチートボディには

「関係ない！！」

そう言うと俺は横にあった家の壁を垂直に駆け上がり、屋上伝いに走る。

ダッダッダッダッターンダッダッターンダッダッダッダッターン

「「キヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア」」

ん？もう少しで家がなくなるな。

「ぎ、銀亜さん！！」

「銀亜殿！！」

ギルドまでもう少しか、よし。

「オラッ!!!」

ダッダ!ダン!!!!!!!

ヒュウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウ

ダアアアアアン!!!!!!!!!

ざわざわざわざわざわざわざわざわざわざわ

「ふ、俺は鳥になれたみたいだな」

うん、気持ち良かったね。

「銀一亜一さん」

「銀亜殿?」

あーそうだったね。

「ゴメンネ」

そう言いながら俺は、ギルドに入っていく。
二人を抱えたまま。

わびわびわびわびわびわびわびわびわびわびわびわびわびわびわ

「ちよっ！おろして下さいー！」

「おろして下さいー！」

「もう少し待て」

俺はカウンターと思われる所に向かう。

「邪魔だな」

その道のりにたくさんの人がいる。
遅れるな、よし、もう一度飛ぶか。

「銀亜さん、跳ばないですよね？」

「銀甲殿どうなのですか？」

ふ、跳ばないよ。

「飛ぶんだよ」

ダアアアン！！！！！！

「「同じじゃないですか！！」」

ト
ン

「さ、降りろ」

此処で良いだろ。

「「は、はい」」

あれっ、なんか静かだな。

そう思い、振り返ると

皆さん、口を大きく開けていた。

「まあ良いや、ほら、二人とも報告しなきや」

「あ、はい」

まだ皆さんこちらを見ている。

「どっかしました？」

そう言いつと

「「「「「「「「スゲエエエエエエエエエエエエエエエエエエ
「「「「「

そして思ったこと。

「五月蠅い」

次回

色々起きます。

を
ご
期
待。

あゝもう一人いるんだ。ふうん、帰ってきてないんだ。……エエエ

質問等感想までお願いします。

あゝもう一人いるんだ。ふうん、帰ってきてないんだ。……エエエ

―――銀亜視点―――

「スゲエエエエエエエエエエ」

「五月蠅いなあ、何だよ」

ほんとに五月蠅い。

何これ、音波兵器並に五月蠅いな。

音波兵器が五月蠅いかどうかは知らないけど。

この位叫べれば、モンスターの怒号サウンドボイスに匹敵するじゃん。

……………そつでもないか。

「五月蠅いのお何の騒ぎじゃー！」

誰だあの爺さん、耳長いな、背が低いな。

しかしだ、俺の責任ともいえるこの騒ぎ、誤っておいた方が良くかもしれない。

「スマン、爺さん。この騒ぎの原因は俺だ」

そう言いながら手を挙げる。

「ほっ」

爺さんは軽快な走りで俺の所まで来る。

「お主見ない顔だのお」

まあ、それはそのとうりだ。

なんせ、世界が違うからな。

「まあな、他の大陸でハンターやってたから、知らなくても仕方ないだろ」

そう言うと、爺さんは納得したような顔になり、俺を見た。

「そうかのお、まあええわい。で、何の用だ？」

誤魔化せたのかな？怪しいところだ。

「ああ、その二人の狩猟を引き継いだんで、その報告だ」

そう言うと爺さんは考えるような顔をした。

「ん？とするとー、レージ村に出たりオレウスとリオレイアの同時狩猟かの？」

ん、そんなことが。

「そつだが……………どうかしたのか？」

何か不都合があつたのだろうか？

知らない訳ではないみたいだけど。

「依頼の申し込みと狩猟の申請を持った伝書バトは着たが、まだ二日もたつとらんぞ？最低でもあの二頭なら、五日がいいところなんじゃが」

「ああ、そんな事か。一時間そこらで倒したぞ」

しーん。

まるで、そんな言葉が当てはまるように、静かだった。

「ほ、本当にか？」

「ああ、嘘だと思うならその二人に聞けばいいし、それ以前に嘘を言う利点なんてないね。それに爺さんだって言つたろ？二日もたつてないって」

そう言った瞬間に4人のハンターが入ってきた。

え〜と先頭から。

一番目にバギィシリーズの大剣。

二番目にネブラシリーズの片手剣。

三番目にインゴットシリーズのガンナー。

四番目にハプルシリーズの双剣。

依頼が終わった後みたいだな。

そう思っていると、バギィシリーズの奴が二人に近寄りこつ言った。

「こんにちは、二人とも。僕の妻になる決心は付いたかい？」

……………はい？

「なるわけないでしょう、前にも言いました」

「その話はお断り申し上げたはずだ」

……………え？

「ふっ、そう嘘を付かなくてもいいよ。君たちと僕は結ばれる関係にあるんだから」

うん、何が起こってんのか分からないけど、ただ言えることがある。

お前キモいよ。

避けられてるよ。

自覚しろよ。

そんな訳だから

「なあ、お前何やってんだ、嫌がってんだろ」

そう言ってしまったのも仕方ないと思うんだ。

次回

この男は何者なのか？

この男の目的とは？

次回は主人公のチートが炸裂するかも。

乞うご期待

あゝもう一人いるんだ。ふうん、帰ってきてないんだ。……エエエ

感想待ってます。

あゝもう一人いるんだ。ふうん、帰ってきてないんだ。……エエエ

――――銀亜視点――――

「なあ、お前何やってんだ、嫌がってんだろ」

言ってしまった。

「うん？、君は誰だ？そして僕の妻たちのなんだ？」

うわ、やっぱりうぜえ。

こいつは、自分の状況理解してんのか？嫌がられてんのが分からないのか？

お前の妻じゃねえだろ二人とも、嫌がられてるのを自覚しろよ。

「お前気が付いてないのか？嫌がってんだろ二人とも」

俺がそう言つと、そいつは俺を馬鹿にしたような顔をして、こつ言つた。

「なんだい君は？これは彼女らの愛情表現に決まっているだろ」

うわ、ウツツツツゼエ。

「なんだ、やっぱり気が付いてないのかお前、その二人の行動がお前への愛情表現だとしたら、この世は愛情で満ち溢れてるな」

「何を言っているのか分からないな。君は何が言いたいんだい？」

こいつ、こっちがオブラートに包んでやってんのに気付けよ。

「まあ、単刀直入に言うとな、その二人は嫌がってたから、離れるってことだよ馬鹿」

そう言うと、馬鹿は火を真っ赤にして、こう言った。

「貴様この僕を馬鹿だと！！？離れるだと！！？何様のつもりだ！！」

カツッチーン。

「テメエこそ何様だ。本人の意思も聞かないで、勝手に妻だの愛情表現だの言ってるじゃねえよ。お前みたいな自分の妄想を他人に押し付けるような奴は人間やめちまえ」

「なんだと！！？僕みたいな優秀なハンターに人間やめちまえだと！！？」

「悪いな、お前のことなんて知らないよ、サル」

「サルだと！！？貴様この僕を“獣殺し”のレイスティン・ハルバートを侮辱する気が！！？」

「あ！？サルが同属殺して得た称号、自慢してんじゃねえよ！」

「ぐうう！！貴様表に出ろ！！僕を侮辱したことを後悔させてやる！！！」

「ああいいぜ！俺が勝つたら二人の半径25メートルに入るなよ！！！」

「僕が負けるなんて考えられないが、いいだろう！ただし！！お前が負けたら僕の奴隷にしてやるからな！！いいだろう！！？」

そうして俺らはギルドの外に出た。

そういえば、口論しているときにアイツの仲間は何も言ってこなか

つたな。

人望ないのかアイツ。

「勝負形式は武器なしでの喧嘩だ！参りましたと言うか、気絶したら負け！わかったか？」

よしそれなら俺のほう有利だな。

そう思い俺は首を縦に振る。

「降参したり、命乞いをするなら今だぞ、痛い目見たくないならそうするんだな」

お前、俺が負ける前提で話してるだろ、まあいいやどうせ俺が勝つ。そう思っていると、ギルドから受付の人が出て来て俺のところに来た。

「ねえアナタ、大丈夫なの？アイツは大剣使いよ。喧嘩なんてアイツの方が有利じゃない」

受付さん、“アイツ”って言うっていいのか？

「心配してくれてんだ、ありがとう。でも大丈夫だよ、勝つから」
そう言つと受付さんは、若干顔を赤くしてこつ言つた。

「そ、そう。ならいいんだけど」

あつそうだ、これ聞いとこつ。

「ねえ、受付さん。アイツの武器とか防具とか壊したらマズイかな」
「？」

そう言つと受付さんは怒つた顔になり。

「受付さんじゃなくてミラ。私の名前はミラ・リントンよ」

あつそうなの、ごめんなさい。

「別に気にしなくてもいいと思うわよ。喧嘩にしたのは、アイツなんだから」

よし、なら大丈夫だ。

「ありがとう」

「どづいたしまして、じゃあ頑張ってるね」

そういうとミラさんは人ごみに帰っていった。

「もういいか!?!」

おっと、こいつのこと忘れてた。

「ああ、もういいぜ」

「じゃあ、いくぞ!」

そういうとサルは突進してきた。

それを俺は

「オラア!!!!!!」

4分の1ぐらいの力でぶん殴った。

「ギヤアアアア!!!!」

サルは痛みで暴れてる。

あれ？頭蓋骨陥没ぐらいしててもいいのにな？

「ぐうう！キサマア！！！」

予想道理サルは大剣を持って突っ込んできた。

「「「危ない！！！」」

シリナちゃんとラミルちゃんとミラさんが声を上げた。

「オラア！！！」

俺はもう一度殴ろうとした、サルにあの反応ができるようにわざと遅くして。

「はッ！！見えてるぞ！！！」

予想道理サルは大剣で防ごうとする。

「関係なえなアアアア！！！！！！！」

俺はサルを、大剣と防具を粉碎しながら殴り飛ばした。

次回

レイステイン（ウザイ奴）はどうなった！？

そしてタイトルの意味が次回明らかになるかも？

乞うご期待！

あゝもう一人いるんだ。ふうん、帰ってきてないんだ。……エエエ

感想お待ちしています。

あゝもう一人いるんだ。ふうん、帰ってきてないんだ。……エエエ

ではご覧ください。

「それにしても、大剣や防具を砕きながら殴るなんて、凄いですね
銀亜さん」

そう言っつてシリナちゃんが俺の右隣を歩き始めた。

「そつでもないだろ、実際軽かつたし」

そつなのだ。

あのサルを殴るとき、やけに人体が軽く感じた。

やっぱりこの体つて、チートだな。

「あのく、銀亜殿？アヤツはハンターでは軽い分類とはいえ、体重
80キロはありますぞ？」

そつそつアイツ身長高くて、ちよつとがっしりした体型だった。

「ん？モンスターより軽いだろ？」

「それはそつですけど」「ため息」

なんだなんだ二人して、ため息をはくと幸せが逃げるぞ？

「じ、じゃあ引継ぎ受注の依頼成功の申請をするわね」
よろしく願いします、ミラさん。

「まずはギルドカードを渡してください」

「はい、どつぞ」

そう言ってギルドカードを確認するミラさん。

「はい、SSランクですねー。え？SS？」

えっ、固まったよミラさん。

「もしもーし、起きてるー？」

やばいマジでリアクションがない。

そっぴんぽんぽん。

「はっ！こっは？」

おお！気が付いたか。

「ミラさん、依頼成功の申請してください！」

少し強めに言う。

「へ？ああ、うん、わかった。少し待ってて」

10分後

「ごめんごめんお待たせ」

そう言ってミラさんが戻ってきた。

「結構時間かかったんですね」

シリナちゃんがミラさんに言った。

「いやね、疑ってたわけじゃないんだけど、本物かどうかを調べてたの」

あ、そうゆつこと。

「でも凄いわね、SSランクなんて」

「そうですね〜」

そこいら辺ホント基準わかんない。

「あつ！そうそう。ティノルちゃんがね、火山に行ったつきり帰ってこないのよ！」

ティノルって誰！？と思った人、シリナちゃんたちのチームのもう一人です。

「えっ、何しにいったんですか!？」

身を乗り出すシリナちゃん。

「うんとね〜確か、周辺の村にいるアプトノスがね、少し怯えてるって言うか、変なのよ。それにその付近のモンスターがあまり居なくなってるね、その調査に行ってると思うけど」

ん！？何だと！？それじゃあそこには“アイツ”がいるのか、少し……いや、かなりまずいな。

「ミラさんその場所、詳しく教えてください」

次回

火山に住む帝王と異世界から来たハンターとの戦いが始まる……！！

楽勝で終わるのか………それとも

乞うご期待!!!

あゝもう一人いるんだ。ふうん、帰ってきてないんだ。……エエエ

次に何が来るか、分かりますよね？

下手な複線でスイマセン。

それと、銀亜に戦わせたいモンスターなど有りましたらどうぞ感想
まで。

感想待ってます。

炎の炎帝・主人公の新たな力

—————銀亜目線—————

「ミラさんその場所、詳しく教えてください」

アイツが居るんだったら、ティノルが危ないからな。

「え？ええ良いけど」

「じゃあ話すわね。行ったのは四日前、リオレウス・リオレイアの番が来る一日前ね。行ったのはテオルネ火山。大昔にテオ・テスカトルとナナ・テスカトリが交尾したと言われてるわ」

……ありえねえよ大当たりかよ、なんか景品出せ。

「いよー」

え？

「ドサア……………」

「銀亜さん!!?」

「銀亜殿!!」

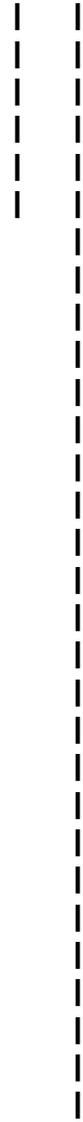
「銀亜君!!?」

「どっした!?!」

「銀亜さんが急に倒れてしまって」

「何じゃと?!?とりあえず部屋に連れてけ」

「は、はー……」



「……………ん？ ……は？」

真っ白な世界だ。

どっかで見た気がするんだが、何処だったかな。

「お久しぶり、げんきだったかい？」

「どうしたんですか？」

「分かった！嘘でしょ、嘘言っただね！」「顔真っ赤」

「いや、心読めば分かるじゃないですか」

心を読めば、結構本心だって分かるはずなんだけどな。

「アナタが心を乱すから聞こえないの！」「顔真っ赤」

あ、そうなの。

「じゃあ、言おうかね」

俺は息を吸う。

「本心ですよ。もし貴女以外に好きな人ができても、向こうは一夫多妻でも一妻多夫でも良いですから」

「／／／／／／／／／／」 「顔から煙が出る」& 「気絶」

「熱っつっ！超熱いじゃん、気絶してるし。早く寝かさないきゃー！」「マジで熱い、どうした風邪か！？」

作者【お前のせいだよ！】

「お！作者だ。作者！手伝ってくれ！！」
俺は作者を呼ぶ。

作者【まあ良いけどさ】

しぶしぶ作者がこっちに来る。

「じゃあ作者は額にタオル乗せて」

作者【ハイよっつと】

よし、じゃあ枕に

作者【あ、おい、ちょっと待て。お前が膝枕しろ】

何を言っているんだ？この作者は。

「何言ってるんだよ。女神様がいやがると思うぞ」

そう言つと作者がにが虫を千個ぐらい噛んだ顔をした。

作者【この天然ジゴロが「小声」。構わないよ俺が作者言ってるんだ、良
いんだよ】

あ、そうか。

作者【じゃ、俺は帰る】

「あ、バイバーイ」

作者は帰っていった。

「さて女神様が起きるまで待つか」

次回

あのジゴロ野郎が、いっぺん地獄を見せてやるつか。

ああ、スイマセンもう一回お願いします。

次回 テイク2

女神様が銀亜を呼んだ理由は何なのか!?

乞うご期待!!

炎の炎帝・主人公の新たな力（後書き）

スイマセン、調子に乗りました。

感想待っています。

炎の炎帝・主人公の新たな力第二話目

―――銀亜目線―――

「ヒマだなー」

女神様に呼ばれてこの真っ白な世界に来た。

しかし何があったか、女神様が顔を真っ赤にして倒れたので、女神様を膝枕している。

しかしなー告白しちゃったんだよねー。

「っ／／／／／／／／／／／／／／／」

あーあ、なんか恥ずかしくなってきた。

歌でも歌って気を落ち着かせるか。

―――
数時間経過―――

「できた」

やっとできたぜ、曲が。

あー大変だったな、膝の感覚がもうない。

最初正座だったけど、今は胡坐あぐらで座ってる。けどそれでも辛いな。

「う……………う……………う……………う……………」
「う……………」

お、起きたか、かれこれ四時間ぐらいいかな。

「おはよう。早速で悪いけど、膝からどいて貰えると嬉しいかな」

微笑みながら、膝に頭を乗せている女神様に微笑む。

「え？……………っ／／／／／／／／／／／／／／／／／／」

顔を真っ赤にして飛びのく女神様。

「よし。じゃあ本題に入りましょうよ女神様。何で呼んだんですっけ」

そう言って立ち上がる。

「ばきべきやばきやけきよべききよべきや」(主人公の膝の音)

……………ナンモキコエナカッタナ。

「そうだったわね。さっきも言った気がするけど、あなたに新たな能力を付けようと思って」「顔真っ赤」

そうなのか、でも今でもチートだしな、色々あった方が良いとは思うけど、やりすぎは良くない。

てか、顔真っ赤だけど大丈夫？

「ねえ女神様、顔真っ赤だけど大丈夫？」

そう言う。

え？何で声に出すのか？神は心の声が聞こえるんじゃないのか？ですか。

何かさつきは聞こえてなかったみたいなので、声に出しました。

「え？ああ、大丈夫
ら膝枕して！！」

いや！大丈夫じゃない！！だから

え、うん良いけど。

作者【下心丸出しだな】

「よいしょっと／＼／＼／＼／＼／＼／」 「顔真っ赤」

「それでなんだけど、あなたに付けたい能力って言うのは三つあるの。

まず一つ目、更なる身体能力上昇。古龍と腕力勝負しても勝てるようになるわ。

二つ目は、モンスターを人間になることができるようにする能力。これは文字どおりにモンスターを人間にできる。

三つ目は、龍になれる能力。これも文字どおりに自分の体の一部も

を
つ
ご
期
待。

炎の炎帝・主人公の新たな力第二話目（後書き）

二個目です。

感想待っています。

「良いの？本気で？え？え？」

「うん／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／」

えっとーそのーあーうーえー

「あ、ありがと／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

作者【あのさ、進んでも良いか？】

「あ、良いですけど」「

作者【あ……そう。じゃ】

「じゃあ作者も言ってることだし、戻すね」
神様

あ、うん、了解。

あ、でも帰るって事は気が戻るってことだよな、だとすると女神様は？

「あ、それなら大丈夫、私も向こうに行くから。ギルドから出たら居るから。でもあんまり早く出ないでね、準備があるから」

あそ。

「じゃあね〜」「

「
ああ

「ドン!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

「ああ、嬉しかったな。あの人なら私の初めてを

」

「はっつ！！！！！！！！！！」

何か嬉しいような、大変なような気がする。

「「わぁ！！びっくりした！！！！」」

ん？ああスマン。

「大丈夫ですか？銀亜さん？」

「だいじょうぶですか？銀亜殿？」

「大丈夫なの？銀亜君？」

「大丈夫です!!。心配させてごめんな」
頭を撫でて見る。

何でかって言うと、なんとなく。

「「「はふうふうう／／／／／／／／／／／」

作者【あゝあ、やっちゃった】

なんだかんだでパワーアップ！

この調子で古龍なんて楽勝だ！？

乞うご期待

おまけの設定紹介

作者が出没するのは、神様が居た世界・主人公銀亜の頭の中・誰も気が付かないけど日常生活・等。

基本的に銀亜主人公にしか聞こえません。（例外を除く）

なぜか、怒り状態のヒロインも聞こえているようです。
銀亜のジゴロ犠牲者

炎の炎帝・主人公の新たな力第三話目（後書き）

感想待ってます。

古龍って意外と弱いね

—————銀亜視点—————

「さてと、行きますか」

じゃあ、テオルネ火山だっけ？に行くか。

「ちょ！銀亜さん！？何処に行くんですか」

ああ、ラミルちゃん。

「いや火山に行こうかと思って」

まっ、この体なら楽勝だろ。

「え？じゃあ私たちも

」

「いや、来るな」

厳しいようだが相手は古龍だ、万が一にも怪我はさせられない。

「相手は、テオ・テスカトルかなナ・テスカトリどちらか、もしくはどちらも居るかもしれない。怪我をさせたくは無いんだ、ここで待っていてくれ」

二人のことを俺は結構気に入ってるみたいだからな。

「待て。許可無く行くことは許さんぞ」

爺さんそこは解決済みだ。

「俺はSSランクのハンターだ。古龍出現予測警戒発令における警戒区域の探索任務に就く、その権限はある」

そうなのである。

SSランクハンター以上には古龍出現予測警戒発令の権限と、その警戒区域への探索任務をする義務が有る。

ちなみにこれは、現場の判断としてギルドマスターをしのぐ権限である。

もし見つかったらの話だが。

そのため発令から見つかるまでは審議期間となり、発令を進言したハンターが探索任務に付かなくてはならない決まりが有る。

「……………なら仕方ないの。許可する、行って来い」

「感謝する」

そう言って俺はベットから起き上がり、横にあった武器を取る。

「じゃ、行って来る」

「」「」「……………行ってらっしゃい」「」「」

「行って来い」

そうしてギルドを出たとき、何かが突進してきた、っ！いや

「会いたかったよー翔君」

「そうですね、俺ですよ」

そう皆さんご存知、女神様である。

「今は、エルリア・ロスレットね。エルって呼んで

ん、エルね、覚えた。

「んじゃ行くか」

次回

火山に行くときに主人公の能力がだんだんと分かってくる。

驚く主人公、それを見て笑う女神様エルリア。

さてはて、この珍道中に何か起きたりするのかな？

乞うご期待

古龍って意外と弱いね（後書き）

感想待ってます。

古龍って意外と弱いね第二話（前書き）

今回はこんがらがってきた銀亜の能力をまとめる話になりそうではないかと
思います。

さてさて、エルリアと銀亜の珍道中、女神様どうなっていくのか。

『古龍って意外と弱いね第二話』開幕にて御座候。

古龍って意外と弱いね第二話

—————銀亜目線—————

「で、どうなってますか？今の俺の能力は？」

火山へと行く道でエル女神様に聞く。

ちなみにエル女神様もハンターになつたらしい。

ハンターランクは俺と同じSSランクで、防具は俺の「銀龍烈将」
神死」と対になつてる防具で、俺が名前を決めたと言つたら「自分
のも決めて欲しい」と言ってきたので、決めておいた。

神姫絶鬼【鬼姫】にしといた。

作者【スイマセン、ホントこんなものしか思いつかないんです】

そして武器は自分で造ったらしい。

これの名前も決めて欲しいと言ってきたので、決めといた。

一つ目は、大剣で真っ白い刀身に黒い線が枝のように走っている剣で、名前を、神帝剣神話ミソロジイ・イロウシヨンの優食にした。

詳しく聞いてみると、強力な龍属性がかかっているらしく、抜刀すると弱い飛竜は本能的に近寄ってこないらしい。

そのため何時もは開閉式の鞘に収めてある。

二つ目は、ボウガンだ。

しかし、一見すると俺らの世界死ぬ前の世界にあった機関銃なんだが………
…まあいいか。

機能も機関銃と酷似していて、全ての弾丸を連射可能、ゲーム風
言うならこんな感じ。

攻撃力：1600

会心率：100%

リロード：極端に速い

ブレ：なし

防御力：270

速射：全弾×33（反動極小）

というところか。

……人の事言えないけど、凄いな。

……と、名前は、しんしききかんじゆう神式鬼神銃にした。

とまあこんな感じで、エルもハンターになっている訳でございませよ。

そこで俺は思った、『俺って、どん位強いんだろ』と。

なんとなくだが凄く強いことは分かる。

しかし、まあ、何だろうね、正直に言つとあんまり自分の能力について考えた事ないからな、どんな能力だったか忘れた。

そんな訳で能力を付けてくれた人、すなわちエル女神様に話を聞こうと思つたわけですよ。

そんな訳でもう一度。

「で、どうなってんですか？今の俺の能力は？」

「んー！ため口でいいよー！でないと思つてしまいますよー！？」

「何で疑問系……………ま、いいか」

「んん！君の能力についてだっけ？それならこの紙に書いてあるよ
」！」

と、言つて俺に紙じゃなくて巻物を渡してくるエル。

「んん？どれどれ、え〜〜〜〜と」

一つ、『身体能力』ライザンと腕相撲して、圧勝ぐらい。
垂直跳びで、500mぐらい。
その他、人類を、いや、動物を！馬鹿にしてんのかと言つぐらいの
スペック。

二つ、『運』まあ宝くじ一等を3回当てられるぐらい。

三つ、『お金』これは、欲しいときに欲しいだけ。

四つ、『ハーレム』ある程度の好感を持っている人に対してその感
情をプラスに持っていきやすい能力。

五つ、『技術』戦闘においての技術をできる限り入れて、さらに体

に覚えさせた。

六つ、『道具』道具というより、アイテムボックスに秘密がある。全ての物が99個入ってる、弾は500個。さらに取り出しても無くならない、補充され続ける。

七つ、『擬人化』自分ではなく相手に効果がある能力。

一定以上の力、一定以上の知能、一定以上の好感、本人の承諾、全てがそろうとこの能力を使える。

文字ど通りに人にすることができる。

自分の承認銀座があれば龍の体に戻る。

人になる時、服は着てない。

使うときは、相手の額に手を付けて能力を使おうと思うこと。

ちなみに、常識などは一般的なものに相手の常識を掛け合わせた物。

八つ、『龍化』これは自分に仕える能力。

体の一部もしくは体全体を龍にできる。

外見は西洋龍を思い浮かべて、その胴体をスリムにした外見。

ちなみに、防具とその他は戻すと元に戻る。

.....
凄いな。

そして俺は巻物を巻き直した。

「これ貰ってもいいか？」

「ん？良いよ」

一応了承を取り自分のポーチにしまう。

「あ！それでなんだけどさ」

エルが話しかけてきた。

「何だ？」

「あのさ、言っておきたい事があるんだよね」

「だからなんだ？」

「実は翔の寿命がすっっっついで延びた」

「……………どん位？」

「700年ぐらい、竜人族でも長い方、もっと延びるかも。さらに死ぬ寸前まで老化しない」

「……………人間や人にしたモンスター達で好きになった人は？」

「えっと、翔に頼る形で寿命が延びる。翔と同じように」

「凄く怖いオーラが出てるよ？」

「……………そう」

「すつつつつつごく不機嫌オーラ出てるんだけど？」

「……………ふうん」

「しめんなさい」

ま、何が来ても驚かないと思っけど。

「うん。あのね」

「ああ」

少し間が空き

「もし、一人だけ死んだ人をモンスターハンターちの世界に能力付きで連れてくる
ことができるとしたら誰にする？」

「じつ言われた。

「は？」

次回

この言葉に銀亜はどつ反応するのか？

誰を呼ぶのか？

乞つご期待

古龍って意外と弱いね第二話（後書き）

感想待ってます。

古龍って意外と弱いね第三話（前書き）

さて、前話にて語られたことに対しての銀亜の返答はいかに!!

なんだかんだで進んでいきます、この話！

『古龍って意外と弱いね第三話』開幕にて御座候。

古龍つて意外と弱いね第三話

――――銀亜視点――――

「え？」

い、今なんて言った？

生き返らせるだと？

そう言ったのか？

「あのね、私の神の力を使いきって最後に一人だけ、一人だけここに能力付きで蘇らせる事ができるんだよ」

それは、俺にとってありがたい事だが。

「大丈夫なのか？」

何が？と言われそんな質問だが、今の俺の混乱した脳みそではこの質問が限界だったし、いろんな意味を含んでいる質問だった。

「ん？ああ、輪廻の輪とかなら大丈夫だよ。私にも何ら問題はないよ」

ああ、そうか。

「で、誰でもいいのか？」

言った後でダメとか言われても恥ずかしいからな。

「別に良いよ？ご先祖様だって良いし、何なら徳川家康でも良いよ？」

別に徳川家康にはしないけど。

だったらあいつにするか。

「じゃあ、そいつに生き返らせても良いか聞くとかできる？」

「ん！オツケーだよ！！」

そう言ったとたん意識が無くなった。

「また此処……………か」

何時ものように真っ白な世界にいた。

「で？誰にするの？」

おっと、そうだったな。

「じゃあ生き返させるのは俺の親友、きんせんこくら金閃黒螺で頼む」

『きんせんこくら金閃黒螺』

俺の親友で、2年前に生まれつき持っていた病気で死んだ。

あいつの家は剣道や柔道や空手などの武術に秀でた家だった。

黒螺はその中でも天才でしかも頭も良かった。
でも俺には勝てなかったけどな。

同姓が言うのもどうかと思うがイケメンで、ファンクラブとかあった気がする。

まあ、一言で言えば『超人』『天才』そんな奴であった。

そんな奴と俺がなぜ親友になったかは実は覚えてない。
そういう物だと思うからな。

とまあ、金閃 黒螺の紹介でした。

「了解!!」

エルがそう言うと、閃光が走った。

「っ!!!!」

急いで目を腕でかばう。

そして恐る恐る目を開ける。

そこには

「黒螺！」

俺の親友が居た。

「やあ、聞いたよモンスターハンターの世界に行っただって。また僕と暴れるかい？」

死んだときよりも身長が伸びた、俺の親友が居た

「ああ、そうだな。暴れるか！」

元気そうな顔で

「そうだね」

凄く良い笑顔をしていた。

「じゃあ、どんな能力にするか決めてくれる？」

エルが言ってきた。

さてどんなものにするかな。

「それについてはもう決めてる」

黒螺が言う。

「へへ、じゃあ言ってる」

「翔と同じ能力」

「え？」

「だから、翔と同じ能力を頂戴」

「う、うん。じゃあ防具とか武器は？」

「防具は、黒をベースに金で模様が書いてある鎧で、動きやすさを

優先してくれ」

「うん、オツケー」

「武器は、太刀。全部の属性を入れてくれ」

「うん、じゃあこんなかんじでいい？」

そう言うと黒螺の体に鎧が着せられていて、目の前には真っ黒い鞘に収められた剣が在った。

「ふ〜ん」

剣を鞘から引き抜くとそこに在ったのは金の剣だった。

「へ〜」

綺麗でありながら圧倒的な存在感があった。

キラキラしているのではなく、威圧しているかのような光沢。

触れれば全てが切れるのではないかという様な太刀だった。

「名前は、『閃光神劍黒火具螺せんこうしんけん くろかぐらにしよう」
満揚げにつなずく黒螺。

………何か気に入らない気がする。

あ！そういえば。

俺だけオリジナルの武器貰ってない。

「翔君も武器作るから要望とかある？」
ナイスタイミングだね。

「じゃあ、俺も太刀で。龍属性を付けてくれ」

「オーケー。こんなんで良いかい？」

目の前に武器が現れた。

「よっと」

鞘は先のほづが白色で手元のほづは黒色だった。

中間は灰色。

これが本当の灰色なのかというように、混沌としているのではなく混ざり合っていた。

「っ！？」

剣を抜いてみると、一気に気温が下がったかのように鳥肌が立った。

そこに在ったのは、『白銀』その一言に尽きる剣だった。

普通の剣のような『鉄』の色ではなく。

作り物の作られた『銀』でもなく。

『白銀』

圧倒的な威圧感を出していた。

「これ、やりすぎじゃない?」

空間を埋め尽くすがごとき威圧感に思わず聞いてしまった。

「ん? ちょっと強すぎる気もするけど、良いんじゃない?」

ま、良いか。

「名前は、りゅうげきしんきれんてい龍撃神鬼煉帝だ」

その時、剣が一瞬光った気がした。

「?」

どうだったか考えていると。

「もう、帰るよ〜〜!」

と、呼ばれた。

「よいしょっと」

立ち上がり、エルと黒螺の方に行く。

「じゃあ、帰るよ?」

「ああ」

ん? 黒螺はどうなるんだ?

「ちよっせ」

「

追伸

黒螺は普通に目の前に居ました。

SSリンクだそうです。

次回

さてさて、親友も加わったこの一行の珍道中。

いつになったら付くことやら。

それもこれもこれからのお話。

乞うご期待

古龍って意外と弱いね第三話（後書き）

感想待ってます。

古龍つて意外と弱いね第四話（前書き）

まだまだ火山には着きません。

『古龍つて意外と弱いね第四話』開幕にて御座候。

古龍つて意外と弱いね第四話

――――銀亜視点――――

「おい、黒螺」

黒螺を呼ぶ。

しかし黒螺は怪訝な顔をした。

「黒螺じゃ無くて」コクラ。アクセントと字が違う

「そんなのどうでもいいじゃん」

「いや、良くないね。この世界に着たんだ、漢字読みだと言いにくい事があるかもしれないだろ」

「でも、この世界に来て会った人は話せてたぞ？」

そう言うと次はエルが話してきた。

「うん、それは君の『幸運』の能力のおかげだね」

「あつ、そうなんだ」

いやーしかし強いなこの体は。

凄く遠くまで見える。

「しかし、竜車の運転できたんだな、エル」

今俺らが乗っている竜車はエルが運転している。

俺はまったく運転できない。

「ん〜、まあね」

いやーホント凄いな。

「.....」

「.....」

「.....」

.....
会話がねえ。

まったくくない。

全然ない。

ヒマ

皆さんヒマは良い事だと言っけどそれは違う。

何故なら!!

娯楽用品等は何も無く!

寝るにしてもまだ早い!

会話をしても持って二分!

周りは何もない草原!

モンスターでも居ないかな?と思っても俺らの剣に怖じ気づいてしまいい、小型から中型までは近付かない!

大型の飛竜は餌もないので来ないし!

と言うより此処は一応人の通る道だ、来るわけがない!

と、言う訳で.....ヒマです!

本でも持ってきてけば良かった。

..... 剣でも見とくか。

最初のほうにもあったが、色々と変えた事がある。

まず名前。

俺と黒螺はカタカナにした。

そうそうこの世界には、カタカナとひらがなと後は英語に似ている文字がある。

漢字は方言みたいなものだ。

そして武器。

俺らの付けた名前が………呼びにくい。

凄まじく読みにくく呼びにくい事に気がついた。

そのため、省略した。

「武器」

俺の武器：『りゅうげきしあれんてい龍撃神鬼煉帝』から『シンレン神煉』へ。

コクラの武器：『せんこうしんけん閃光神劍くろかぐら黒火具螺』から『センコク閃黒』へ。

エルの武器：大剣はそのままの名前『ミソロジイ・イロウシヨンミソロジイ・イロウシヨン』へ。

ポウガンは『しんしきかんじゅう神式鬼神銃』から『シンシキ神式』へ。

「防具」

俺の防具：『ぎんりゅうじょう銀龍烈将【シンシ神死】』から『ぎんじょう銀将』へ。

次回

主人公を悩ませるヒマ。

もうちょっと続くかも。

頑張れ主人公。

という訳で、次回も

乞うご期待

古龍って意外と弱いね第四話（後書き）

感想待ってます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0374v/>

モンスターハンター馬鹿が行く異世界はモンスターハンターに似た世界でなけ

2011年11月8日00時05分発行